僕の居場所は君の隣で。

白雪なずな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の居場所は君の隣で。

【Ｎコード】
Ｎ５５０２Ｄ

【作者名】
白雪なずな

【あらすじ】
世の中に、あたしほど女子の制服が似合わない女がいるだろうか。男女――オトコオンナ。まさにその言葉がぴったりのあたしに、恋をする資格なんてあるだろうか。

第1話

世の中に、あたしほど女子の制服が似合わない女がいるだろうか。
男女――オトコオンナ。まさにその言葉がぴったりのあたしに、恋をする資格なんてあるだろうか。

「今日、また告られちゃってさぁ」
「あっそ」

またへらへらしながらあたしの教室まで報告にきやがった悠一の奴に、あたしは勤めて冷静に言ってやる。
いつものことだ、こんなこと。それでもやっぱり面白くない。

早瀬優、17歳女。ガサツな男言葉に、男らしく切ったベリーショートの髪。
どっからどう見ても少年。それでもこんなあたしだって一応女だ。好きな奴くらいいる。
斉藤悠一、17歳男。今あたしの正面でへらへら笑ってる男だ。
こんなやつがなんでモテるのかはあたしには理解不能だけど、たぶん顔の中身で稼いでいるんだろう。

悠一とあたしは幼馴染。しかも、幼稚園から高校まで一緒で、いわゆる”腐れ縁”という奴だ。
いつもこいつがあたしから離れないもんだから、何だか噂で勝手に付き合っていることにされているけど……別に、そういうわけでもない。悠一はただ小さい頃からのノリで、いつもあたしと一緒にいるだけだ。
……そう思うと、なんだか腹が立った、無償に。声にとげを含ませて、あたしは悠一に言葉を投げつける。

「お前が誰に告白されようがあたしには関係ないだろ」
「何だよ、冷たいなぁ。ちゃんと断ってきたけど？　優ちゃんのために」

悠一は少し不満げな様子だ。でもきっとからかってるだけだろう。こいつはそういう男だ。

「何であたしのためだよ。別に勝手に付き合えばいいだろ」

そしてこいつが告られたなんていちいち言ってきやがるから、こうしてあたしの男言葉にも磨きがかかるんだ。
それなのにいくらあたしが突っぱねても、やっぱり目の前のこの男はへらへらとした余裕を見せる。いつもいつも、それが癪に障る。そんなあたしの内心に気付いているのかいないのか。悠一はにっこりとして口を開く。

「優ちゃん、やきもち？」
「ばっ……！　勝手に言ってろよ。お前と一緒にいると、あたしにまでバカがうつるんだよ」

慌てて叫んだ。図星だ、でも認めるはずなんかない。悠一はわざとらしくがっかりしたような表情を作った。

「何だ、違うのか。あれ？　でも優ちゃん。顔が赤いみたいだけど？」

にやにやと、悠一が面白そうにあたしの顔を覗き込んでくる。あたしはさっと顔を逸らす。
ふざけやがって。悠一は楽しそうだけど……あたしは全然面白く

ない！

「あ。優ちゃん」

「まだ何か用かよ」

さっさと悠一を置いて教室に戻ろうとしていたのに、引き止められてしまった。あぁ、もう。ここで無視できないのがなぁ……。

ばつ悪く振り向くあたしに、悠一はとんでもない言葉を持ってきた。

「プレゼントは、優ちゃんがいいな」

「……は？」

「明日。俺の誕生日」

目が点になってるあたしを気に留める様子もなく、悠一は相も変わらずへらへらしていやがる。

何だよ、こいつ。ふざけるのはいい加減にしてほしい。

「楽しみだなぁ」

怒りのあまり、言葉が出ないあたしを尻目に、悠一は嬉しそうにそんなことを言っている。

……つーか、誰が良いって言ったよ。あたしはこいつを殴ってやりたい衝動をぐっとこらえた。

耐えろ、あたし。ここで殴ったら、本当の男女だ。今年はもうちょっと女らしくなるって、目標があるんだから……。

「早瀬！」

あたしがそんなことを思っていると、ふいに教室からあたしの名

前が呼ばれた。

「坂下。何？」

そう返すと、クラスメートの坂下洋平はにこっとしてから、あたしのところまで来た。

その手にはなにやら書類が握られている。

「うん、文化祭の打ち上げのことなんだけど……」

「ああ」

坂下の言葉に、あたしは頷いた。あたしと坂下はクラス委員なので、クラスの代表になっている。

坂下が持ってきた書類を見ながら、坂下とあたしはそのことについて話し始めた。

クラスが違う悠一は話に入れるわけも無く、面白くなさそうにあたしたちの会話の様子を見ている。

でも、かまってやらない。あたしは無視を決め込んで、悠一をあえて視界にいれずに、坂下と話し続けた。

「……それで、今度の日曜にしたいんだけど……とりあえずさ、俺たち二人が早めに行って、予約入れとこうと思うんだけど。早瀬、大丈夫？」

「うん、別にいい……」

「だめ」

あたしが坂下の言葉に頷く前に、なぜか悠一が答えた。

一瞬きょとんとしてから坂下が可笑しそうに笑い出すし、あたしはもう、恥ずかしいのと呆れたのとで言葉が出ない。独占欲丸出しのお子様に。

けど、悠一の顔を見ると、珍しくへらへらしていなくて、拗ねたような、少し怒ったような顔だった。
その顔を見ていると、なんだか可笑しくなって笑ってしまった。
すると、坂下を向いていた悠一の眼があたしを見る。

「何だよ」
「あれ？　悠一君。やきもちか」

あたしは悠一の口調を真似て言ってやった。

「……うっせぇ」

すると、悠一は少しだけ顔を赤くした。――今日は、ちょっといつもと逆かな。でも、まぁ……。
たまには、こんなのもアリかもね。

第1話（後書き）

これは四年ほど前、まだ私が小説を始めたばかりの頃に書いたものです。とても見苦しいですが、ご容赦ください。

第2話

斉藤悠一。あたしが思うに、こいつは本物のバカだ。

「優ちゃん。俺、3点取っちゃった」

悠一はそう言って、あたしに3点のテストの答案を見せてきた。

……少しくらい、恥ずかしいとか思えよ。

いつものごとくやってきたこいつを前に、あたしは盛大に溜息をついて腕を組んだ。

「つーか、何の用だよ。わざわざあたしにそれを見せに来たんじゃないだろ？」

あたしが冷たく言ってやると、悠一は少し拗ねたように口を尖らせた。

「だって、今日誕生日じゃん。俺の」

その一言で、悠一の言いたいことはなんとなくわかってしまった。けどこいつの言うとおりにしてると、大体ろくなことがないんだ。

あたしは気付かないふりを決め込んで、冷やかに口を開く。

「……何で、誕生日だからってあたしの教室までおまえが来んだよ」

「だって、優ちゃんは会いに来てくれないし。会いに来てくれないと、プレゼントも貰えないし？」

「無いよ。プレゼントなんか」

あたしの言葉に悠一は、わざとらしくショックを受けた顔をして

から、あたしを恨めしそうに見た。
そりゃあ、あたしは悠一が好きなんだ。プレゼントあげようかな、なんて思わなかったこともない。

けど、可愛くラッピングされた誕生日プレゼントを頬染めて渡すなんてのは、可愛らしいオンナノコにだけ許されることだろ？
あたしには所詮似合わないんだ。それに、こいつはジョークで言ってるだけで、あたしが真面目にプレゼントなんて渡したら引くかもしれない。毎年そんなことを考えてばかりで、プレゼントなんて渡したことがない。

悠一はそんなあたしの気持ちなんて知るはずもなく、相変わらずぶーたれた顔で子供のように拗ねている。

「……優ちゃん、俺との約束は？」
「何だよ、約束って」
「俺に、優ちゃんをくれるって……」
「はぁ？　誰がそんなこと言ったよ」

あたしは更にショックを受けた顔をした悠一を、冷めた目で見た。こいつは、どっからどこまでが本気なのか全くわからない。

いや、でもやっぱりこれはジョークだろう。悠一はこれでもかなりモテている。
あたしみたいな男女よりよっぽど、かわいいオンナノコが周りにいっぱいいるんだ。だからこれは、からかわれているだけだ。
この前坂下にやきもち焼いてたのだって、ずっと一緒だった幼馴染のあたしが取られるのが悔しかっただけで、おもちゃを取られたくない子供の感情だろう。別に恋愛感情なんかじゃないんだ。そう思うとムカムカして、あたしは少し口調を強める。

「あのね。おまえのくだらない話に付き合ってる暇なんて無いんだよ。早く教室戻れよ」
「……じゃあ、百歩譲ってこれでもいいよ」

悠一はあたしの話を全く聞いていない様子で、気難しい顔で腕組みしている。けど、やっぱりわざとらしい。
悠一のやることなすこと、演技ががってるんだ、いちいち。あたしをからかうことを、楽しんでやがるとしか思えない。
けどさすがに次に悠一の口から出てきた言葉には、からかわれているだけと分かっていてもどきりとした。

「優ちゃんが、俺を好きって言ってくれるだけでいい」
「なっ……！　何でそんなこと言わなきゃいけないんだよ。大体、今更プレゼントなんて必要ないだろ」

あたしは自分の顔が赤くなっていくのを隠したくて、大きな声で言った。……隠したかっただけなんだけど――。

「……言えないの？　優ちゃん、俺のこと嫌い？」

へらへらするかと思ったら、悠一は、そんなことを言って心底悲しそうにあたしの顔を見た。ちょっと待てよ。その顔はナシだろ？

「優ちゃん？」

きょとんとしやがって。

「――っ、好きだよ！」

あたしは気づいた時には、叫ぶように言ってしまっていた。――
悔しいけど、完全に降参だ。

第3話

あたしはその顔に弱いんだよ。悠一。……実はおまえ、あの時、それをわかってて狙ったんだろ？

「また来たのかよ」

「そうだよ。優ちゃんのために」

呆れ顔のあたしを気にすることもなく、今日も懲りずに教室にやってきた悠一は、ニヤニヤしてあたしの顔を見た。

まぁ、悠一の言いたいことは、なんとなくわかるけど。あたしは顔をしかめながら、あえて聞いてやった。

「……何で、あたしのためだよ？」

「だって、優ちゃんは俺が好きなんだし？」

するとやっぱり予想通りの答え。この男、確実に調子に乗っている。

「でも、昨日はびっくりしたなぁ。優ちゃんが、俺を好きだったなんて……。まぁでも、うすうす気づいてはいたけど。優ちゃんが、俺を好きだってことは」

悠一は面白そうに好き好き連呼している。わざとらしすぎるんだよ。

「あれは、まぁ、その場のノリっつーか……」

もごもごと口ごもるあたしに、悠一は笑顔であたしの頭をぽんぽ

んとなでた。

「優ちゃん、ウソはよくないって」

「はぁ？　ウソって、何がだよ！」

あたしはムキになって、思いっきり怪訝な顔を作って見せた。のに、悠一は余裕の笑顔。やっぱり、どうしようもなく癇に障る。

「ほんとは、俺が好きでたまんないんだろ？　俺にはもうわかってるって」

「すっ……、す、す、好きじゃねーよ！」

声が上ずってしまった。上手く嘘がつけない自分が、こんなとき本気で恨めしい。

あたしの意思に反して、頬が熱くなる。駄目だ、悠一をつけあがらせる。赤くなるな、あたしの顔！

「ほらほら、照れない照れない」

上機嫌に悠一が言う。ムカつくんだよ。遊んでるだけのくせに。どうせあたしの本当の気持ちを知ったら、迷惑がるだけのくせに。人をおもちゃにしやがって……！

「調子に乗るのもいいかげんにしろよ！　お前なんか……！　お前なんか、大っきらいだ！」

気づくとあたしは悠一に向かって、大声で叫んでいた。教室中の視線があたし達に注がれる。

はっと我に返る。最低だ。いくらなんでも、ひどいこと言った。

あたしの気持ちが悠一に届かないからって。これじゃ、ただの八

つ当たりじゃないか。

雄一の顔が見れなくて、あたしは思わず俯いた。すると悠一の手があたしの頭をぽんぽんと撫でた。

その手が何だかいつになく優しくて、縋るような思いで勢いよく顔をあげて悠一を見るあたし。

悠一は、少しだけ哀しそうな目をして笑っていた。

「ごめんね」

そう言って、悠一は自分の教室に戻っていく。追いかけることもできなくて、あたしは自分の手を強く握りしめた。

なんで悠一が謝るんだよ。なんでそんな顔するんだよ。いつもみたいに冗談で流してくれたっていいじゃないか。

傷付けたのはあたしなのに、どうしてこんなに……胸が痛むんだ。

第４話

次の時間の授業は、はっきり言って全く上の空だった。傷つけた。キズツケタ。その言葉だけが頭の中を回ってる。
だって、いつもへらへらして、何言っても動じないくせに。何だよ、こんな時だけ。

無性にイライラする。あいつをはったおしたい。あいつに文句言いたい。あいつに――謝りたい。いつもみたいに笑ってほしい。
からかわれてるだけでも、やっぱり好きだからそばに居たいんだ。あたしの前で笑ってくれるだけで、あたしは嬉しかったんだ。

いつのまにか、心の中、あいつでいっぱいになってる。授業中だって言うのに涙がにじんで、ぐっとこらえた。
おかしいだろ。こんな感情、あたしになんて似合わないだろ？
こんなあたしの涙なんて、無様なだけだろ？
らしくない。らしくない。らしくない。
あたしはそんな女らしい女じゃない。オンナノコな感情なんて持ってない。
……はずだったのに。今まで、こんなに簡単に泣いたりしたこと、なかったのに。

どうして悠一のことになると、あたしはこんなに弱くなるんだろう。

だめだ。ちゃんと謝らないと、あたしは自分の気持ちにけりが付けられない。
居てもたっても居られなくなったあたしは、授業の終わりのチャイムが鳴ると同時に、勢いよく教室を飛び出した。

悠一の教室の入口近くまで行くと、あたしにいち早く気付いて、悠一が廊下まで出てきた。

「優ちゃん？　どしたの、優ちゃんから来てくれるなんて」

いつも通りのへらへらした笑顔。さっきのことなんてなかったみたいな態度。

そうだ。こいつ、昔からこういうとこあるんだった。

あたしは昔から言葉遣いあらくて、喧嘩するたびひどいこと言ったりした。それで、その夜は自己嫌悪で眠れなかったりした。

でも決まって悠一は、次の日には何もなかったように笑ってた。わかりにくいけど、それが悠一の優しいとこ。

――それが、あたしの好きなとこ。

「……ごめん、悠一。本当は嫌いだなんて思ってない。あたしは――」

「わかってるよ。優ちゃんのことくらい。言葉でああいっても、気持ちの裏返しなんでしょ？」

「でも、傷ついたんじゃ……」

「ああ、演技だよ演技。ちょっとは、ぐらっときたっしょ」

悠一はさらっととんでもないことを言ってのけた。「エンギ」。あたしがその言葉を理解するのに、数秒の時間がかかってしまった。

じゃあ、あたしが必死に悩んで、傷つけたって自己嫌悪して。あの胸の痛みは、何だったんだ？

「でも、やっぱり優ちゃんは単純でからかいがいあるね。俺、そういうとこすごく好きー」

悠一の言葉にかっとなって、あたしは思いっきり悠一の頬をはたいた。平手打ち。案外、打った方も痛いんだな……。
うたれた頬を片手で抑えながら、悠一が驚いたようにあたしを見ている。あたしは怯むことなくきっとその目を見返す。
やっぱり、悠一にとってあたしはただのおもちゃみたいなものだ。からかって遊んで、楽しんで。

あたしの気持ちなんて、知りもしないんだ。一方通行なんだ。昔からいっつもそうだ。こういうこと、昔も何度かあった。
悠一の言葉、あたしが真剣に受け止めても、悠一はいつも冗談でからかってるだけだった。
わかってたはずなのに。どうして期待するんだよ、あたし。馬鹿みたいじゃないか。

込み上げそうになる涙を押さえつけたあたしの口から、驚くほど低い声が出てきた。

「あたしが、傷付かないと思った？　男同士みたいに冗談、言い合えると思った？　……でもおあいにく様。あたしだって一応女で、お前のふざけた茶番に付き合えるほど強かねーんだ」

けど涙をこらえるのも限界で、一筋こぼれてしまった。絶対に見られたくなくて、慌てて手で隠したあたしは悠一に捨て台詞のような言葉を投げつける。

「やっぱり嫌いだよ、お前なんて！」

伸びてきた悠一の腕を乱暴に振り払って、あたしはその場から全速力で走り去った。悠一は、追ってこなかった。

第5話

あれから、悠一はあたしの教室に来なかった。
いつもしつこく、一緒に帰ろー、なんて言ってまとわりついてくるくせに、帰りも来なかった。だから今日は一人で帰った。

悲しい、のか、あたしは。自分の気持ちがよくわからない。悠一の気持ちがあたしにないこと。
悠一にからかわれていたこと。もう悠一と話せないかもしれないこと。腹がたつと同時に、泣きたくなるくらい悲しかった。

両親は仕事、兄貴は大学。誰もいない家の中、あたしは窓の外を見る。
窓からすぐ見える隣は悠一の家だ。突き放したくせに、こうして気になってる。どうしたらいいのか、もうわからない。

そんなことを考えながらぼけっとしていると、不意に玄関のチャイムが鳴った。
けどあたしは玄関に出ようとして躊躇する。二度チャイムを押して、間を開けてもう一回。それが昔から変わらない、あいつの合図だったからだ。

「なんだよ。……悠一だろ？」

玄関前まで行って、あたしはドアの向こうの人物に声をかける。
するとドアがちょっとだけ開いたかと思うと、にゅっと、ドアの隙間からぬいぐるみが顔を出したのでぎょっとした。
あたしの好きなキャラクター、ブルドックの富士太郎のぬいぐるみだった。

「ゴメンナサイ」

ドアの向こうからのその声は、やっぱり聞きなれたあいつの声。

富士太郎が、ぺこりと頭を下げた。ぬいぐるみは手を入れて動かせるタイプのものみたいだった。悠一は隠れて見えないから、何だか人形劇でもやられている気分だ。

「ごめんなさい」

悠一の声と同時に、何度も頭を下げる富士太郎。不覚にも、胸がきゅうとした。

こいつは、やっぱり女心を心得てやがる。そういうとこ、すごくムカつくけど……やっぱり、あたしも女なわけで、惹かれてしまうわけだ。

「許してくれる……？」

ひょい、と富士太郎の陰から顔を出して、こっちを窺うように悠一があたしを覗き見る。

富士太郎よりもつぶらな瞳がしょげている。そんな子犬みたいな目をされて、許さない、なんて言えるわけない。

「あー、もういいよ」

あたしがそう言ってやると、やっと富士太郎がドアの隙間から引っ込んで、開かれたドアからしゅんとした悠一が入ってきた。

こいつは身長が結構高いから、その表情とのギャップが何だか可笑しい。大きな体した子供みたいだ。

「悠一が居ないと、あたしもなんか調子でないし。あたし……なんだかんだ言ってもやっぱり、大事なんだ、悠一のこと」

自分で言いながら、あたしは自分の気持ちを確認できた。そうだ、悠一とはずっと一緒に居るし、やっぱり誰にも変えられない大事なやつだ。例え気持ちが手に入らなくても、そばに居られればいいじゃないかと、そう気づけた。

悠一はそんなあたしを驚いたように固まってじっと見ていた。あたしは悠一に笑みを向ける。

「ま、おまえのふざけた性格、ちゃんとわかってっか……ら……っ」

言葉を、最後までうまく言えなかった。あたしは表情を固まらせた。富士太郎が、悠一の手から地面に落ちるのが見えた。

なんだこれ。何が起こってるのかわかんない。心臓がバクバク言ってる。悠一がすごく近くに居る。腕があたしの背に回ってる。

これって、抱きしめられてる、ってことなんだろうか。

「優ちゃんが好き」

悠一の、いつになく低い声。真剣だ。からかってるんじゃなかったのか？

なんでこんなあたしを、とか、やっぱり冗談なのかも、とか、好きって恋愛感情って意味じゃないのかも、とか色々考えたけど、でも今、悠一の態度はどこも嘘じゃなくて、疑うのは失礼だとすら思った。

だけど、どうしたらいいんだ、こんなとき。動揺してる。顔が熱い。だめだ。あたしはこんなのには向いてないんだ。

「あ……たしも、……す、好きだよ」

上ずる声で、思わず、本心が出た。悠一の腕の力が強くなった気がした。心臓が壊れそうだ。

すごく好きだって、実感されられてしまった。

第6話

あいつがあたしに好きだと言った。あたしもあいつに好きだと言った。……でも、だからどうだっていうんだ？

「コイビト、じゃない？」

友達のヨシコは、あたしの話を聞いてそう言った。あたしはロボットのようにその聞き慣れない言葉を反芻する。

「……コイビト、ですか」

「そう。コイビト」

言って、ヨシコが当然のように頷く。「コイビト、ねぇ」と呟いて、あたしはため息をついた。

あたしがあいつに好きだと言った。あいつもあたしに好きだと言った。これって、つまり、”両思い”。普通のドラマやら何やらでは、それでハッピーエンド。でも、あたしと悠一に、そんなの当てはまるわけなかったんだよなぁ……。

「早瀬、これ」

あたしがうなだれていると、ふいに坂下が話しかけてきた。例の、打ち上げの話だ。

あたしは坂下に手渡された予定表に目を通した。

「うん、いいんじゃない？」

目を通し終わって、あたしは笑顔で坂下に予定表を返した。坂下

も笑顔になる。

「良かった。それで、ここのとこなんだけど……」

「おはよう、優ちゃん」

坂下がそう言いかけた時、あいつが来た。悠一はあたしと坂下が話しているのを見ると、明らかに不機嫌な顔をした。子供か、こいつは。

「……また、後でね」

坂下は面白そうに含み笑いでそう言うと、自分の席に戻っていった。それで、悠一の機嫌も少し回復したようだ。

「優ちゃん。おはようは？」

悠一はいつものノリで、笑顔でそう話しかけてきた。けど……あたしは、今日はちょっといつもと違うんだよ。

「……朝会っただろ」

「何だ、優ちゃん。ご機嫌斜め？」

あたしがそっけなく返事を返すと、悠一があいかわらずへらへらした顔であたしの顔を覗き込んできた。

あたしは湧き上がってくる怒りを、必死で抑える。

昨日あんなことがあって、あたしは昨日の夜も、全然眠れなかったっていうのに。今日の朝、家の前で会った時も、けろっとしやがって。おまけに、何事も無かったかのように振る舞いやがって。あたしは朝からムカついてんだ。昨日のあたしの睡眠時間を返せと言いたい。

――別に、自分から確認すればいいだけのことなんだ。昨日のこと。ちゃんと、悠一の本心なのか。

悠一を疑ってるわけじゃない。昨日の悠一は真剣だった、それはわかってる。けど……怖い。あたしはこんなんだし、万が一悠一に冗談だって言われたりしたら、もう立ち直れない。だから、あたしは逃げて、悠一からの言葉を待ってるだけだ。

オサナナジミのオトモダチからの変化が欲しい。でも変化が怖い。イラつく。でもそれは、本当は悠一に対してじゃなく、あたし自身の弱さに対しての憤りだ。

そんなあたしの内心など知るはずもない悠一が、不思議そうにあたしの顔を見る。

「優ちゃん。何怒ってんの？」

「別に怒ってねーよ」

悠一に少し乱暴にそう言ったとき、あたしの机にある、自分以外の誰かの筆箱が目に入った。……多分、坂下がさっき忘れて行ったんだろう。あたしは坂下に返そうとして、席を立ち上がった。

「坂下、これ――」

あたしが悠一を置いて坂下に筆箱を返しに行こうとした時、悠一の奴があたしの腕をつかんだ。

「……何だよ」

あたしは振り向いて、ぶっきらぼうな口調で言った。するとまた、

拗ねたようなあの顔。また、やきもちかよ。

「優ちゃん。俺の前では、俺だけ見ててよ」

「何でだよ。別にあたしの勝手だろ！」

そう叫んで……あたしはまた、ぐっと言葉に詰まった。悠一が悲しそうな顔をしたからだ。そんな顔されると、どうしようもなくなる。あたしは、どうしてもその顔に弱いんだ。

「ああもう、わかったよ」

「そうそう。素直なのはいいことだね」

観念してあたしが席に座りなおすと、悠一が嬉しそうにそんなことを言いながら無邪気な笑顔を見せる。

子供みたいにあからさまに嫉妬するこいつ。呆れるんだけど、やっぱりあたしにとってその笑顔の威力は大きい。

コイビトじゃ、ない。まだ、そんな関係じゃないと思う。

けどきっと前とは違ってる。これが、友達以上、コイビト未満ってやつなのかな。

でも、やっぱりあたしは悠一が好きだから、不安でも、今はこのままでもいいかななんて思っちゃうわけだ。こんな関係も、まぁ、アリなんじゃないかって。

第7話

最近、あいつが来ない。最近って言っても、ほんの一週間の話なんだけど。別に、来なくても何も変わらないけど？

でも、何か物足りないような気がするんだよなぁ。まぁ、あいつは毎日来てたから、そう思うだけなんだけど。

だから、寂しい、なんて。悪いけど、そんなことこれっぽっちも思ってねーよ、全然。

「なんか、ムカムカする！」

休み時間、あたしは座っている自分の机に倒れこむようにして叫んだ。

「……早瀬、それってやっぱり、あいつが来ないから？　さいと――」

あたしが素早く睨みつけたので、坂下は苦笑まじりに、言いかけた言葉を呑み込んだ。

斉藤、って言いたかったんだろうけど、あいにく、悠一は何の関係も無いんだよ。

つーか、やることもたくさんあるし。あいつが来なくて、休み時間が有効に使えて助かってるくらいだ。

あたしは気を取り直して、やりかけの英語の課題プリントに向き直った。

「えーと、ここが”ａｔ”で……」

あたしの鉛筆が動く。

「ここが、”ｏｎ”で……」

また、あたしの鉛筆が動く。

「ここは……」

わからない。三問目にして躓いてしまった。あたしは成績は悪い方じゃないけど、英語だけはどうも苦手で、中学生レベルにも達してないんだ。頭を悩ませていると、不意に背後まできた人物から助け船を出された。

「そこは、”ｇｏ”じゃねぇ？」

「あぁ、”ｇｏ”！　……って違うだろ。それは動詞……」

あたしは答えを訂正しながらも、聞き覚えのある声に反応していた。

聞き覚えのある、というか長年なじんだ感のあるこの声は。振り向くと、やっぱりそこに居たのは奴だった。

「久しぶり、優ちゃん」

悠一はいつものように笑顔でそう言った。つーか、久しぶりって、たった一週間なんだけど。

でも、なんかこいつの笑顔に胸がきゅうとなる。

「何してたんだよ、おまえがこんなに来なかったこと無かっただろ」

あたしは顔が赤くなりそうだったので、それを隠すように早口で言った。すると悠一が水を得た魚のようにニヤニヤしはじめる。

「来てほしかった？」

「べっ……べべ別に、そんなんじゃねーよ」

悠一はどもるあたしを見て可笑しそうに笑っている。何がそんなにおかしいのかわからないけど、とにかくイラついた。

するとやっと笑い終わった悠一が口を開く。

「来なかったのはね、心理作戦。」

「はぁ！？　何だよ、それ」

まだ少し面白そうな顔をしている悠一に、あたしは思いっきり怪訝な顔をした。

「一週間、俺が会いに来ない。そうすると、優ちゃんは寂しがる。そして、俺の大切さに気がつく」

悠一はそう言って、もっともらしく頷いた。……バカもいい加減にしてほしい。

しらけるあたしをよそに、悠一は面白そうに微笑んだ。

「何、優ちゃん、俺に会えなくてそんなに寂しかった？」

悠一はからかう様にあたしの顔を覗き込んでくる。けど、あたしはふいっと顔をそむけた。

へらへらして、何が心理作戦だよ。あたしがこの一週間、どんなに……。

「優ちゃん？」

悠一は笑みを消して、少し不思議そうにそっぽを向いたあたしを見ている。

つーか、毎日来てた悠一が、急に来なくなったから、物足りないような気がしてただけだよ。

だから、寂しいなんて。……寂しいなんて――。

「……寂しかった」

あたしは、気がついたときには、そう呟いていた。言ってしまったあと、自分でも驚いて一気に赤面する。

でもまぁ……ほんとに、あたしは寂しかったんだ。事実なんだから、言ってしまったことは仕方ない。否定はしないでおく。

「……優ちゃん、ときどきドキッとさせるよね」

すると悠一はそう言って、あたしの顔を見て苦笑した。ドキッとした、のか。

つーか、いつもと違うそんな笑い方されると、あたしもドキッとするじゃねーかよ。

「あれ、斉藤。そういや、補習は終わったわけ？」

その時、ふいに坂下がそう言って、面白そうに悠一に話しかけてきた。悠一が慌てた様子で坂下の方に身を乗り出して叫ぶ。

「さ、坂下！　言うなってあれほど……」

「補習って、赤点の？」

妙に慌てている悠一に、あたしは尋ねた。あたしの問いかけに、悠一は少し赤くなって黙り込んでいる。
何だよ、だからこの一週間来なかったのか。朝と帰りの補修に出てたから。

それを知って、今度はあたしが笑いだした。

「笑うなっつーの」

悠一は赤い顔したまま、少し怒ったような口調で言った。この前はけろっとした顔で赤点見せてきたくせに、変なとこでカッコつけんだから。

あぁ、もう。くやしいけど、好きだなぁ……。
つーか、なんか今思うと、最近あたし、ことごとくこいつに振り回されてないか？　やっぱり、くやしいんだけど。
でも、まぁ、おまえも赤くなってるとこを見ると、お互い様みたいだし？

悠一。……明日も、来るんだろ？

第8話

あいつの短所を挙げ始めるときりが無い。いつもへらへらしてることとか。テストはほとんど赤点だとか。子供っぽくて、すぐやきもち焼くとか。あと、何だかよくわからないけど、妙に女にモテることとか。

……あれ？　でも最後のは、もしかして長所なわけ？

「沢木さんが、斉藤君に告白したらしい」

ヨシコのこの一言で、あたしの教室は朝から騒がしい。まぁ、悠一の奴が告られてんのはそんなに珍しいことじゃないんだけど。問題なのは、相手が沢木さんだってことだ。沢木さん、といえば学年一の美女で、学校には知らない人がいないくらいだ。

別に、あいつが誰に告られようとどうでもいいけど、あたしは朝から不愉快だ。

「ちょっと、優。どうすんの？」

ほら。また来たよ。耳にたこができそうなその言葉。

「どうするも何も……あたしには関係ないっつーの」

あたしは本気で心配そうに話しかけてきたクラスメートに、心底嫌そうに言った。

つーか、別にあたしはあいつの彼女って訳じゃないし、関係ねーんだ。

「早瀬。意地張らなくていいって」
苦笑しながらそう言ってきた坂下を、あたしはすごい目で睨んだ。
関係ないって言ってるのにどいつもこいつも、どうしてあたしに振るんだよ。あぁ、もう。多分、もうすぐあいつも……。
「優ちゃん。ちょっと聞いてよ」
――ほら来た。
「俺、また告られちゃってさぁ」
「知ってるよ。沢木さんだろ？」
あたしがそう言うと、悠一は明らかにわざとらしく驚いた顔をしてみせた。
「何、優ちゃんなんで知ってんの？　やっぱり、俺のこと気になってたんだ？」
悠一はそう言って面白そうにあたしの顔を覗き込んだ。噂になってることぐらい、お前も知ってんだろーが。――やばい。マジにイライラする。
「別に、おまえのことなんてどうでもいいんだよ」
「優ちゃん、意地張るのは良くないよ」
あたしが少し声を荒げると、悠一はますますニヤニヤして調子に乗りやがった。
いつもよりずっと、イライラした。

「意地じゃねーよ！　おまえも早く教室戻れば！？」

あたしは大きな音を上げて椅子から立ち上がると、悠一を置いて教室のドアに向かった。

いつもとちがうあたしの様子に、騒がしかった教室が一気にしんとなった。

「優ちゃん？」

悠一が動揺した様子であたしの腕をつかんだけど、あたしはすごい勢いで振り払ってやった。

沢木さんとでも誰とでも、勝手にイチャついてればいい。勝手にしろよ。別に、あたしには関係ないんだから……！

廊下に出たあたしの腕を、追いかけてきた悠一が再びつかんだ。

「優ちゃん、どうしたの。急に」

「どうもしねーよ。放せよ」

あたしは今度も振り払おうとした……けど、こいつの力が思いのほか強くて、できなかった。

「別に……おまえとあたしは付き合ってるわけでもないし？　沢木さんとでも勝手に付き合ってろよ。あたしには関係ねーよ！」

あたしは腕をつかまれたまま、俯きがちにそう叫んだ。そうでもしないと、ガラにも無く涙なんて出てきそうだったから……。

「関係なくないだろ」

「関係ねーよ」

あたしの腕をつかんだまま、真顔で言う悠一に、あたしは冷たくそう言い放った。

悠一がむっとしたようにまた何か言おうとしたけど、ちょうどそこでタイミングよく授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。あたしは悠一に向って冷たいセリフを投げつける。

「早く戻れよ。もうお前と話すことなんて、何もないから」

「……わかったよ」

苦々しそうに言って、悠一はあたしの腕から手を離し、教室に戻っていく。自分で突っぱねておいて、引き止めたいなんて思った。

けど、できるわけない。この前とおなじ。悠一の背中をただ黙って見送ることしかできない自分が、情けなくて嫌だった。

最終話

あれから一日中、あたしは悠一を避け続けた。

休み時間はずっと女子トイレに隠れた。

昼休みも、見つからないように、いつもは行かない別校舎のクラスの友達のとこまで行って弁当食べた。

帰りも、悠一が来る前に逃げるように帰った。

家に着くなりあたしは自分の部屋に閉じこもって、ベットの上でふとんをかぶってくるまっている。

あの時、あたしが悠一を突っぱねてしまったとき。

教室の中からあたしと悠一のやりとりを見てたヨシコが、帰り際に「素直になりなよ」、と一言だけ言ってきた。

ずっとその言葉が頭の中を回っている。

でも素直になんてなれるわけない。本当は、悠一に沢木さんとなんて付き合ってほしくない。

本当は、ずっとあたしのそばに居て欲しい。

でも言えるわけないんだ、そんなこと。あたしじゃ無理なんだ。

だって、あたしはこんなんだから。

泣きたい。でも泣けない。だってあたしは、弱いオンナノコじゃないから。

そんなことを思いながら一人悶々としていると、不意に部屋の扉

がノックされた。
今日も仕事で親はいないから、家に居るのは兄貴だけだ。放っておいてほしいって言っておいたのに。
「兄貴？　あたし、今日は誰とも話したくねーって……」
「……俺」
その声に、あたしは驚いて思わずがばっと体を起こした。兄貴じゃなくて悠一の声だった。
ふとんの中に入ってたから、玄関のチャイムの音が全然聞こえなかった。
兄貴のやつ、なんで悠一を通したりするんだ。
「入るよ、優ちゃん」
「入ってくんな！　……何の用だよ」
ドアを開けて入ってこようとする気配がして、あたしは慌てて言った。
けど、ドアの向こうの悠一の気配は、あたしとは対照的にとても落ち着いているような感じがした。
「大事な話。……だから、入っていい？　ちゃんと顔を見て話したいから」
「……好きにしろよ」
こうなったらもう、悠一は決して帰らないだろう。こういうときの悠一は強情だ。
そう思って、観念して力なく呟くように返したら、真顔の悠一が入ってきた。

「関係ないなんて、言わないでよ」

ベットの前まできて、片膝をついてあたしと視線を合わせた悠一が、ぽつりとこぼす。悠一の真剣な雰囲気に緊張する。

嫌な感じだ。あたしは目をそらしたいのに、悠一の目はちゃんと考えろって言ってるみたいだ。あたしは悠一から視線を外して苦笑を洩らした。

「まだその話？　関係ないって言っただろ」

「関係なくない。だって、優ちゃんは俺が好きで、俺も優ちゃんが好きなんだから」

「だから何だよ！」

あたしは声を荒げて、引き下がろうとしない悠一の顔を見た。

だからなんだって言うんだよ。好きだって気持ち確認しあっても、悠一は何も変わらなかった。

気持ちが通じた、それが大切なことだってわかってる。でも、確かなものがないと、不安なんだ。

黙ってあたしを見ている悠一。あたしは再び言葉を漏らす。

「……不安なんだよ。だってこんなあたしじゃ、誰かと普通に恋愛できるなんて思えない」

「優ちゃん」

投げやりなあたしの言葉を聞いて、悠一が顔をしかめる。

けど、溢れるみたいにあたしの中のマイナスな感情が言葉になっていく。止まらない。

「あたし全然女じゃねーし、可愛げもないし、ガサツで口悪くて…

…！」

「……優ちゃん。それ以上言ったら、怒るよ？」

悠一の冷たい瞳。本気で怒ってる。

いつもはあまり見せないその表情に一瞬ひるんでしまって、同時に今まで必死に押さえつけてた涙が、堰を切ったように出てきた。

ぶちまけるように、あたしは心の中のぐちゃぐちゃを吐き出す。

「だって……！　不安なんだ。こんなあたしじゃ、男みたいなあたしじゃ……。それでも、好きなんだ。悠一のこと、すごく好きなんだよ！」

一度流してしまったら涙は止まる気配を見せなくて、なすすべもなくあたしは涙を許してしまう。

そんなあたしを悠一に見られるのが嫌だった。

あたしに涙なんて似合わない。女らしいかわいらしさなんて持ってない。

でも、好きなんだ。悠一が好きなんだ。

悠一を好きなあたしはどうしてもオンナノコで、あたしは、そういう自分が無様だって思った。

だから絶対、あたしの涙を悠一に見せたくなかった。見られたくなかった。

それなのに泣いてるあたしをじっと見てる悠一がイラついて、あたしは悠一の胸を拳でドンと叩いた。

「見んな、バカ！　あたし……っ、強くて、絶対泣いたりしないんだ。女らしくないから、せめて、強い子でいようって……」

自分でも何言ってるのかわかんないままそこまで呟いて、あたしは限界を迎えた。
嗚咽まで漏らしながら泣きじゃくった。
悠一に見えないように、せめて俯いて顔だけは見られないようにしながら。

すると、不意に頭を撫でられた。小さい子によしよしをするように、悠一があたしをあやしている。

「……わかってないね、優ちゃんは。すごく可愛いんだって、気付いてないんだ？」

その言葉に思わず、涙を隠すことも忘れて、顔をあげて悠一を見上げた。悠一はすごく優しい目をしていた。

胸の奥がつんとした。そうだ、隠してた、ずっと。あたしの中の小さな感情。
あたしは男女だから、オンナノコであっちゃいけないと、自分をそう決めてきた。

けど、悠一はそんなの簡単に暴いてしまうんだ。
あたしの心の中の、ほんの少しのオンナノコの部分。そこをちゃんと、見つけてくれてるんだ。

可愛いなんて言葉、今まで誰にももらったことない。
きっと誰かに言ってもらったとしても、そんなわけないって、あたしは信じなかった。

けど悠一は違うんだ。悠一の言葉は魔法みたいに、あたしの頑ななな心を軽くしていくから。

「ほら、泣かない」

悠一がいつになく優しい声で言う。こいつ、どこまでも要領がいい。あたしの心を簡単にさらっていく。

――くやしいけど、やっぱりどうしようもなく好きだ。

「優ちゃんはそのままでいいから。そのままが、好きだよ。……だから、俺の彼女になってくんない？」

そう言った悠一の、少し赤くなった顔。なんだかすごく、安心できた。

こんなあたしでも、悠一は好きだって言ってくれる。

曖昧な関係が怖かった。あたしはやっぱり悠一のその言葉を、待ってたのかもしれない。

そんなことを思うと、自然に笑顔になった。

「しょうがねーな。お前がそこまで言うなら、なってやるよ」

泣き笑いになってしまったけど、あたしはあたしらしい言葉で、精一杯の気持ちを返した。

すると突然スイッチが切り替わったように、悠一がいつものごとくふざけた笑顔になって、あたしの顔を覗き込んできた。

思わず目が点になる。さっきまでのふんわりした雰囲気がぶち壊しだ。

「ふーん？　でも、優ちゃん。そんなに泣くほど、俺が好きだったんだ？」

「なっ……！」

瞬時にかっと顔が熱くなる。こいつ、わかって言ってやがる。やっぱり意地が悪い。やっぱり、こいつは最悪だ。
だけど今、少しだけ頭が冷静になって。
今更だけど悠一の前で泣きまくった挙句に、好きだ好きだと連呼した自分が無性に恥ずかしくなった。
照れを隠すように、あたしは思いっきりっ悠一から顔を背けた。

「そ、そんなんじゃねーよ、自惚れんな！」
「ま、そういうことにしといてやってもいいけどね」

乱暴に否定するあたしに、悠一はいつものごとくそんなことを言って無邪気な笑顔になった。

こいつの短所を挙げ始めるときりが無い。

いつもへらへらしていることとか。テストはいつも赤点だとか。子供っぽくて、すぐやきもち焼くとか。
でも悠一を見てると、何だかそれも、長所に思えて来るんだよなぁ……。
あたしは、そんなところが好きなんだ、って。

でも悠一、お前も笑ってるし？　まぁ、いいや。その笑顔に免じて、そんな所も長所ってことで。

好きの気持ち、ずっと大切にしていきたい、って思うんだ。
だからこれからも。あたしの居場所は、悠一の隣で。

≪完≫

その後

いつも通りの学校、いつも通りの教室。ただ、一つだけ違うのは、今日がクリスマスだってこと、かな。

「あぁ、もう。何でうちの学校は、クリスマスまで学校なんだよ！」

あたしは教室で、思いっきりイヤな顔で言ってやった。教室にいた担任が、少し肩身の狭そうにこそこそと出て行った。

――まぁ、学校なのは担任のせいじゃないんだけど。

でも、授業終わった今、もう五時だし。クリスマスって言ったら、やっぱり特別だし？

そこにいた坂下が、そんなあたしを見て面白そうに笑った。

「仕方ないよ、早瀬。うちは進学校だし」

「でも、クリスマスまで授業すること無いだろ」

不満顔のあたしに、坂下はニヤッと笑った。

「何だよ、早瀬。今まではクリスマスなんて気にしたことなかっただろ。誰か一緒に過ごしたい人でもいんの？」

「べっ……別に、そんなのいな――」

「おい坂下。優にちょっかい出すなよ？」

あたしが顔を赤くした時、あいつの声があたしの言葉を遮ると同時に、後ろから抱きしめられた。いつの間に来たんだか。

「あぁ、悪い斉藤。おまえの、だもんな？　邪魔者は消えんね。じ

ゃあね、早瀬」

坂下は面白そうにそう言うと、鞄を持って教室を出て行った。あぁ、もう。お前のせいで恥かいたじゃんか……悠一。

「ほら、さっさと準備して」

悠一は未だ機嫌の悪い様子で、あたしを促した。

「な、何だよ」

「一緒に帰んだよ。……クリスマスじゃん」

悠一は少し照れた様子だ。まぁ、でも、クリスマスだし？　今日はあたしも、素直に従ってやるよ……今日だけ、ね。

どうでもいいんだけど、クリスマスは恋人同士の奴らが多いんだよ。どうでもいいんだけど……。

まさか、あたし達も、あんな風に見えてんのかな。ねぇ、悠一？

「寒い！」

そう言って、震えてんのは……悠一。どうでもいいんだけど、普通は逆じゃないのかよ。

まぁ、今更悠一には何も期待してないけど？

「あ、優ちゃん。ちょっと待って」

いつも通りの帰り道のほうに行こうとしたあたしを、悠一は引き止めた。

「何？」

「今日は、こっちから帰ろうよ」

悠一は、もう一本の方の道を指差した。あたしは首をかしげる。

「……そっちは、逆方向じゃないのかよ？」

「いいから」

「何でだよ」

「いいから、黙ってついてきて」

「……悠一。おまえ、何たくらんでんだよ」

あたしの最もな質問にも動じない悠一に、仕方なくついていきながらあたしは言った。

「さぁ。でも、優ちゃんは喜ぶと思うよ」

そう言って子供みたいに無邪気に笑う。いくらそんな顔されたって、悠一の言うことはいつも信用できないんだよ。

いつも期待はずれだから、多分今日も……って、思ってたんだけど。

「わ、すごい……」

あたしの口から、こんな言葉が出てしまった。……そういや、今日はクリスマスだよ。

大通りにいるあたしと悠一の前で、盛大に飾り付けられた大きなクリスマスツリーがいろんな色の電球をキラキラと輝かせている。

あたしはらしくもなく、不覚にもその綺麗さに見入ってしまった。

「きれいだろ。俺からプレゼント」

悠一はそんなあたしを満足そうに見ながら、得意げにそういった。ドラマ気取りやがって。でも、やばい。マジに嬉しいかも。

そんなことを思って景色に浸っていると、にこにこした悠一が突然あたしに向かって両の腕を広げた。

「……何してんだよ」

「何って……だっこ」

「は、はぁ！？」

「ほら、照れてないで」

と、こいつはいつも通りだったんだけど。

この後起こったことは絶対、クリスマスだから、あたしがおかしくなっただけだ。絶対そうだ。

あたしが自分から、悠一に寄っていったなんて――。

悠一は少し意外そうな顔をしたけど、微笑んであたしを抱きしめた。

あたしの好きな悠一の匂いがしたのと同時に、悠一の心臓があたしのと同じくらい早くドキドキしてんのがわかった。

こんなの、ありえない話だけど……離れたくない、かも。

「優ちゃん」

「何だよ」

頭の上から悠一の声がしたから、あたしは照れ隠しに、少しぶっきらぼうに返した。

すると思ってもみなかった言葉が降ってきた。

「……意外と、胸ある？」

「――は？」

悠一の言ってる意味を理解するまで、かなりの時間がかかってしまった。

「なっ……！　なっ、何考えて……」

あたしは真っ赤になって叫んで、慌てて悠一を突き飛ばすようにして離れた。

こいつ何考えてんだよ！　……しかも、意外とって何だよ！？

「おまえは、いつもそんなことしか頭にないのかよ！」

「大体」

「何だそれ、少しは恥ずかしいとか思わないのかよ！」

「別に。男なんて、そんなもんだよ。頭の中はそんなことばっかり」

あたしは口をパクパクと動かしたけど、言葉が見つからない。

そういや悠一は前も、誕生日にあたしが欲しい、なんてふざけたこと言ってたよ！

あまりの怒りに、悠一を置いてさっさと一人で歩いた。それに、どーせあたしは色気ないし、大方いつもはもっと色気のある女優とかのことばっかり考えてるんだろう。それが男だ。わかってるけど、面白くない。

「優ちゃん。ちょっと待ってよ」

悠一はそう言いながらあたしの後をついてくる。絶対に止まって

やらない、そう決心したあたしは早歩きで歩き続ける。
後ろから歩いてくる悠一が苦笑するのが聞こえて、ふと首にマフラーをふわりと掛けられた。
思わず立ち止まって振り向くと、それはやっぱりさっきまで悠一がつけていたマフラーだった。

……さっきあんなに寒いって言ってたのに。やっぱり、こいつ、女心をしっかりわかってやがる。
いつになく優しい目をした悠一が、白い息を吐きながら口を開く。

「嘘だよ」
「……嘘って、何がだよ」
「いつも考えてんのは、優ちゃんのことばっかりだよ」
「！」

あたしは、不覚にもまた赤面してしまった。でも、悠一。――おまえも、顔が赤いみたいだけど？
こんなの、まるで、どっかのバカな恋人達みたいだ。でもまぁ、クリスマスだし。
たまには、ね？

その後（後書き）

時季遅れのクリスマスネタでごめんなさい。フォルダの隅っこにあるのを見つけたので、ついでに投稿します。

また気が向いたらその後の話書くかもしれないので、その時はよろしくお願いします。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

さらにその後1

斉藤悠一、１７歳高校生。近頃訪れた春に、けっこうな浮かれよう。

それというのも、ずっと昔から一緒の幼馴染で、半年と数か月前、やっと恋人に昇格した“彼女”のおかげ。

夏祭りの夜。待ち合わせ場所に向かう足取りは軽く。本当は急く気持ちのまま、早く行って待ってたいとこだけど。

それは男としてやっぱり、カッコ悪いから。わざと遅れて到着。

「ごめんね、待った？　優ちゃん」

待ち合わせ場所に立っている人物に、いつものごとく、軽く笑ってみせる。浮かれた自分を隠して。うん、いつもの俺っぽい。

予想通り、待ち合わせ時間ぴったりに来たと思われる彼女は、俺の姿を見るなり眉を吊り上げた。

うんうん、やっぱり怒った顔もかわいい。さすが優ちゃん。俺もすっかり骨抜きだ。

「遅っせーよ！　時間にルーズな男って最悪だ」

言って、優ちゃんは機嫌悪くぷいっと俺から顔を背けた。そんな様子に、心の中で思わず笑う。

いつも通り、可愛い顔に似合わない男言葉。だけどその男言葉こそが、優ちゃんの魅力を惹き立てている。と俺は思う。

あくまで本人は無自覚なんだろうけど。

夏祭りの日に優ちゃんとデート。調子に乗ってきた俺は、さっそく優ちゃんをからかいにかかる。

「かわいいね、浴衣。俺のために着てきてくれたんだ？」

俺が言うと、優ちゃんはあからさまにぎくりとした様子だった。指摘されたくなかった優ちゃんの気持ちはすごくわかるんだけど、そこをあえて。

実際、予想外の格好だったのだ。優ちゃんの性格からして、浴衣姿なんて絶対に拝めないと思っていたのに。

だけど俺がからかうと、そこはやっぱり優ちゃん。予想通りの反応を返してくれた。

急激に赤面し、可哀想なくらいあせりだす。そして照れ隠しとばかりに、声を荒げるのだ。

「ばっ、バカ言ってんじゃねーよ！　第一、お前のために着てきたわけないだろ。ヨシコが無理やり……！」

「ふーん？」

見透かしたような悪ノリのまま、優ちゃんに適当に生返事。勿論わざとだ。

すると真っ赤な顔をしたまま、優ちゃんは言葉に詰まった。これを見ているとどうも、からかい癖がついてしまって。

しばらく黙った後、優ちゃんが仕返しとばかりに俺をじとっとした目で恨めしそうに見て言った。

「お前、最近バカに磨きがかかってない？　ニヤニヤすんのやめろ

よ」

優ちゃんに指摘されようと、幸せは隠しきれないのだ。

俺が緩んだ顔を直そうともしないので、ただでさえ辛抱という言葉が苦手な優ちゃんは、痺れを切らしたようだった。

「あー、もう。先行くぞ！」

そんなことを言い捨てて、優ちゃんは下駄をカコカコ鳴らしながら、おっかなびっくりと言った感じに走っていく。

面白い走り方だ。浴衣姿と言ったらそれなりに色っぽいはずなのに、色気のかけらも見えない。

可愛くてたまらない。世の中の男たちは、どうしてこんな可愛い子を見落としているんだろう。

……いやいや、待て待て待て。坂下みたいなやつもいるんだから油断できない。

あいつは優ちゃんのことが好きなんだ。……俺の勘だけど。優ちゃんを見るあの邪な目線。油断ならない。

いやむしろ、優ちゃんのクラスの男どもはみんな優ちゃんを狙ってるんじゃないのか。

「何ブツブツ言ってんだよ！　早く来ないと置いてくからな」

飛んできた優ちゃんの怒鳴り声で、惜しくも『優ちゃんのクラスの男を潰す計画』は中断させられた。

先に走って行ったと思ったら、優ちゃんは立ち止まって俺を振り向いていた。

なんだかんだ言いつつ、結局はこうして待っててくれるわけで。

俺は浮かれた気分が増していくのを感じながら、待っている優ちゃんのところまで歩いた。

さらにその後１（後書き）

もう一作で夏祭りの話を書きまして、この二人ならどうかな、と思ったら無性に書きたくなっちゃいました。

前話書いたのは四年前。そして今回は、今現在の私の文章です。

違和感を感じるかもしれませんが、ご了承くださいませ。

さらにその後2

優ちゃんが下駄を鳴らしながら、俺の隣で歩く。露店の明かりが広がって。夏祭りのにぎやかな雰囲気。

ああ、いいムードだ。甘酸っぱい雰囲気に酔って、幸せ気分のまま、俺は優ちゃん手に向けて自分の手を伸ばした。

だけど手をつなごうと、その手に触れた瞬間――手の甲を思いっきりつまままれた。

「いてっ！」

俺は痛みに顔をしかめる。ムードも何もない。さっきまでの甘酸っぱい気持ちが台無しだ。

優ちゃんはと言えば、露骨に怒った顔だ。でもやっぱりその顔も……キュートだ。っと、思わず死語が出てしまった。

「何してんだよ！　まったく、油断も隙もない……」

いつものごとく優ちゃんが怒鳴る。

そこまで嫌な顔をしなくてもいいじゃないか。と、怖いので、その言葉は胸の中で呟くにとどめておく。

やっぱり、俺の彼女は手ごわい。こんな調子で、もう付き合って一年近いのに、全くの進展がなくて。

一筋縄じゃいかない優ちゃん。まぁ、そんなところも好きなわけだけど……少し、切ない。

夏なのに、心の中に隙間風。俺はいつになったら報われるんだろう。

だけどそこはめげない俺。男は強く在らねば。……ちょっと意味が違う気もするが気にしない。

気を取り直して、優ちゃんがトイレに行っている間に、水風船をゲットしておいた。

「バカお前、あたしがこんな可愛らしいもんで喜ぶと思ってんの？」

俺から水風船を受け取った優ちゃんは、そんなことを言ったけど。予想通り。無自覚だろうけど、顔がゆるんでいる。

幼馴染を舐めて貰っちゃ困る。実はキャラクターもののぬいぐるみなんかが好きなことだって知ってるんだ。

「まぁ、どうしてもって言うなら、もらってやってもいいよ」

俺の予想はまたしても当たり、優ちゃんはそんなことを言った。照れ隠しのためかぷいっとしながらも、水風船を手首にかけて嬉しそうだ。

嬉しさに頬をほんのり染めて、でも喜びをかくして、そっけない顔を装って。全く、素直じゃないんだから。

「なっ、何笑ってんだよ！」

知らず知らずのうちに笑ってたようだ。優ちゃんはそれが気に入らなかったらしく、そんなことを言って更に顔を赤くした。

その顔にやられる。結局はいつも俺の負け。でもそれでいい。

もうすぐ花火の始まりだ。

優ちゃんが飲み物を買ってきてくれると言うので、俺は花火を見る場所取りの役目を請け負った。

優ちゃんと二人で見つけた、開けた芝生。寝ころぶのに丁度いい。ちらほらと人がいるけど、この場所を見つけきれなかった人間も多いんだろう。祭りに来ていた人数に対して、少し少ない。

優ちゃんを待ってそのまま寝転んでいると、次第に眠気が襲ってきた。

夢と現実の挟間をさまよって。すると、待っていた気配がして、優ちゃんが戻ってきたんだと悟った。

だけど、どうも様子がおかしい。いつもの優ちゃんなら、俺をたたき起こすのに。

瞼の向こうから、そのまま、近づいてくる優ちゃんの気配。すぐにピンときた。これは――キスだ。

花火はいつの間にか始まっていた。さすがの優ちゃんも女の子。その雰囲気には勝てなかったみたいで。

嬉しさが込み上げる。優ちゃんも、ちゃんと俺のことを好きでいてくれたんだって。

そのまま寝たふりを続けてやろうかとも思ったけど、ふと、心の奥からいじわる心が湧いてきて。

すれすれのところで、ぱちりと目を開けてみる。すぐに、優ちゃんが驚いたように飛びのいた。

「っ……！　悠一、起きて……」

「どーぞ？　続き」

少しだけ、からかってやるつもりで。俺は少し笑いながら、そんなことをと言った。

だけど、それが優ちゃんを本気で怒らせることになってしまったようで。

ボカっ！　とすさまじい効果音付きで、優ちゃんの拳が俺の頬にクリーンヒットした。

優ちゃんが怒った顔で、目に溜まった涙を必死にこらえている。頬を抑えながら、やばい、と直感的に思った。

「バカにすんのもいい加減にしろよ！」

捨て台詞のように叫んでから、優ちゃんが身をひるがえして走りだす。

こういうとき、優ちゃんの足が速いのが本当に厄介だ。でも、俺も一応男。それに相手は走りにくい浴衣だ。

優ちゃんの姿が小さくならないうちに、花火なんかそっちのけで、俺もすぐに後を追った。

さらにその後3

上がった息が苦しかった。逃げるように駈け出したあたしを、あいつは当然のごとく追ってくる。

だけど絶対に捕まるわけにはいかない。どうしてもどうしても、悔しかった。

愛しさに負けて、らしくもなくキスなんてしようとしたあたし。だけどあいつは気づいてて、寝たふりをしやがった。

恥ずかしいとか、照れくさいとか。そんなことはどうだっていいんだ。

ただ、あたしは今まで全く縁がなかったこともあって、色恋沙汰なんて、そんなことに対する免疫がまるでない。

あいつは2人でいるとすぐ、手をつなごうとかしてくるけど。

あたしには無理なんだ。心臓が壊れそうになる。例えあいつの、指先に触れるだけだって――……

痛いくらいの心臓の鼓動の中、至近距離で、あいつは目を開けた。あの平然とした顔が、ショックだったんだ。

なんだよ。なんだよ……！　ドキドキしてんのは、いつもあたしばっかりじゃないか。

涙がにじんで、視界がぼやける。ちくしょう、走りにくい。浴衣なんか着てくるんじゃなかった。

その時、足首に鋭い痛みが走ると同時に、がくんと視界が揺れて。足をくじいたんだって気づいた時には、すでに遅い。

前のめりに倒れて行く自分を自覚して、あたしは転ぶのを覚悟してギュッと目を閉じる。

――けど、転ぶかと思ったら、視界はそのまま固定された。後ろからあたしを抱える、奴の気配。

夏に密着して暑苦しいのか、それとも、奴に触れた背中が熱くなってるのか。

かっと火照る自分の頬に気づかないふりをして、あたしは力の限り暴れた。

「っ離せよ！　お前なんて、お前なんで大っきらいだって、言ってるだろ……！」

目一杯の声で叫びつつ、こんなに渾身の力で暴れてるのに、奴の腕といったらびくともしない。

こんなことで、男だってこと、意識させられたくなんかなかったのに……！

「悠一！　はなせって――」

後ろにいる奴を振り向いた瞬間、私は絶句した。背後で華々しく散っていく、花火の音。

一切の動きを止めたあたしの唇に、一瞬だけ触れていったのは――

「ごめん」

悠一がぽつりと言った。花火の光に照らされたその頬が、心なしかほんのり染まっている。

ようやくこの現実を理解しかけたあたしは、ばっと威勢よく両手で口をおおい隠した。

わなわなとふるえるあたしの体。怒っていいのか、呆れていいのか、スルーすりゃいいのか。

それともこれはもしかして、喜ぶべき場面なのか？　だめだ、全然わからない。

「俺だって余裕もないし、バカにもなるよ。だって優ちゃんと一緒にいられるんだから」

悠一の声が、花火の音と重なって。かすかに聞こえたその言葉。

ああ、あたしはひとりでから回ってたのかもしれない。余裕がないのは自分だけだって？

そうだ、こいつ。いっつもへらへらしてるけど、本当はそれって、本音を隠してるだけで。

あたしは十分知ってるじゃないか。こいつのことなんて、それこそ飽きるくらいに。

そういうことにやっと気づいたあたしの気持ちが、急速に解けだしていく。

怒るでもなく、あきれるでもなく、スルーするでもなく。あたしが選んだのは、笑うという選択肢だった。

さらにその後４

くじいた足も大したことがなく、あたしは奴と帰り道をともにしていた。

花火の後の、人間たちが少しずつ散っていくこの感覚は、さみしくてあまり好きじゃない。

悠一が押し付けてきた水風船を振り回しながら、あたしはむすっとして歩く。

結局なんだかんだで、花火なんてろくに見ることができなかった。それどころじゃなくて。

それもこれも、元凶といえば、隣にいるこいつのせいだとしか言いようがない。

あたしは奴をにらんでみるんだけど、まるで効き目のないこいつの能天気さが癪に障る。

どうして、あたしはこんな奴が好きなんだ？　自分でもさっぱりわからない。

「ねぇ、優ちゃん。俺、もう一回ちゅうしたいな～、なんて……」

へらへらしながらふざけたことを言い出す悠一を、あたしはさらに凄みを利かせて睨みつける。

さすがにたじろいだように、悠一がちょっと身を引いた。

「なんて……えへ！」

まるで、ハートか☆のマークでも付けたような口調で言って、悠一が取り繕ったように笑う。
……アホだ、こいつは。こんな奴にかまってやるほどあたしは暇じゃねーんだ。

だけど今日はさんざん手玉に取られて、このまま帰ってやるというのも悔しい話だ。
いいことを思いついたあたしは、それを実行に移す決心を固めた。

「裕一、ちょっと耳かせよ」

あたしが言うと、「なになに？」なんて言いながら、素直にあたしに耳を寄せる裕一。
今に見てろよ。そのへらへらした笑顔、崩してやるんだから。

あたしは内緒話をするように見せかけて、けど不意打ちに、悠一の頬にキスをしてやった。
ついさっきのあたしと同じように、ばっとあたしから身を引いて、手で頬を抑える悠一。

「調子に乗んな、バカ」

決め台詞とばかりに、あたしは言い捨ててやる。これであたしの勝ち。
ぽかんとして立ち尽くす悠一を置いて、あたしは下駄を鳴らしながら先を歩いた。

まだまだ、こいつとは付き合いが長くなりそうだ。でもそれも、悪くないって思うんだ。

頬に触れるのとは全然違った感覚を思い出し、あたしはこっそり、唇に指先で触れてみた。

さっき頬にキスした時、あたしまで一緒に赤面してしまったのは、まぁ内緒の話ということで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5502d/

僕の居場所は君の隣で。

2011年4月8日21時01分発行